

熱帯果樹栽培記録 (1)

オオミノトケイソウ

(*Passiflora quadrangularis*)

宮本和弥

昭和50年12月当園大温室内に長さ1.5 m、径0.5 cmの苗を植栽し、植え付け10日後に油粕1 kgを施した。翌年3月には、つるの長さは約10 mに達し、3~4本の親づるを伸長させていた。親づるの総延長は、30~40 mに達すると思われた。4月に初花をみ、4個が結実し6月に着色した。これより数個づつの結実があったが、とくに8~9月には約30個の結実を見た。

管理

施肥 植え付け後10日目から月1回の割合で株当たり油粕1 kgを施した。9月以後は、油粕に骨粉を加えたものを施用した。昭和52年からは3~4か月に1回の割合で、施肥を行った。

整枝 親づる(主幹)は、3~4本とし垂主枝は空間に応じて出すようにした。

剪定 収穫が終わった時または、繁り過ぎた時に行い、時期はとくに定めていない。剪定する枝は、収穫が終わった枝、花ぶるいして陰枝になったもの、徒長枝などで、切り返す位置は、垂主枝に1~2葉残して切り取った。なお、垂主枝も古くなったものは切り返して更新を計った。

開花

開花は、4~9月の間が最も多く、剪定1か



オオミノトケイソウ (*Passiflora quadrangularis*) の花

月後がとくに多い。これは、光線の通りが良くなり新しい枝に花芽ができたためと思われる。なお、開花には温度よりも日照とくに光の強さが関係しているようである。開花は、一斉で3~4日間続いて咲き、夏季には7~10日の間を置いて次の開花が見られた。



オオミノトケイソウ (*Passiflora quadrangularis*) の果実

結実

前述のように昭和51年4月に4個の結実があった後、月平均数個づつの結実があり、8~9月には約30個の結実を見たが、これらはいずれも人工受粉は行っていない。なぜ8月にとくに多く結実したのかを調べてみると、オオミノトケイソウの隣りに植えているツルムラサキ科のマディラカズラが6月下旬から花を着けていて、これにたくさんのハナアブが来ていたので、昆虫によって受粉が行われたものと考えられた。このことから、結実には受粉が必要であることが分ったため、以後は人工受粉を行い、つねに10個以上の結実を得ている。

人工受粉

花の寿命が1日であるため受粉作業は、晴天の場合は午前10時前後、雨天の場合は午後1~2時に行った。花粉の採取は、できるだけ異株から取るようにし、異株に開花がない時は異株から花粉を採取した。また、当日他に開花がない場合は、前日開花の花より花粉を採取し受粉に用いた。なお、10月以後の開花では、葯の破れていないものが多くあったので、花粉は前日

花のものを利用することが多かった。しかし、前々日の花の花粉を用いて10個の花に受粉を試みたが、結実は皆無であった。

受粉の結果は、2日後には判明するため結果枝に次の開花を見ても受粉は行わないようにした。これは、1結果枝(1~1.5 m)に2果結実させてみたが、鶏卵大まで肥大したところで1果または2果とも落果することが分ったためである。

結果後の管理

受粉に成功した果実は、急激に肥大し始め1週間後には10倍に達した。(図及び表参照)肥大は、その後も進み16日後には成熟果の7割にも達した。

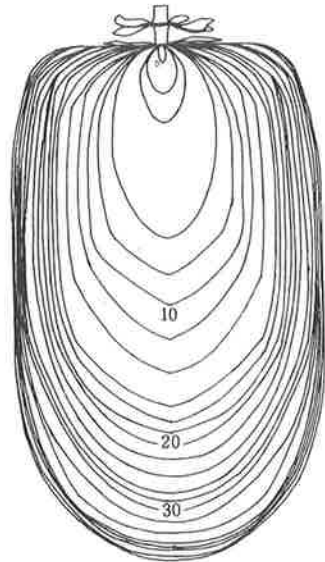
肥大し始めた果実が鶏卵大に達したとき、果実または果実の着いた枝を来園者に見やすい位置に移すため、移動させると原因は分らないが非常によく果実が腐敗した。果実のいろいろなステージにおいて移動を試みたところ、受粉後10日目から16日目までに行うのがもっとも結果がよく、これを過ぎると肥大し過ぎて落果することが分った。

なお、受粉から完熟までの日数は、4月に行ったもので平均75日であった。

その他

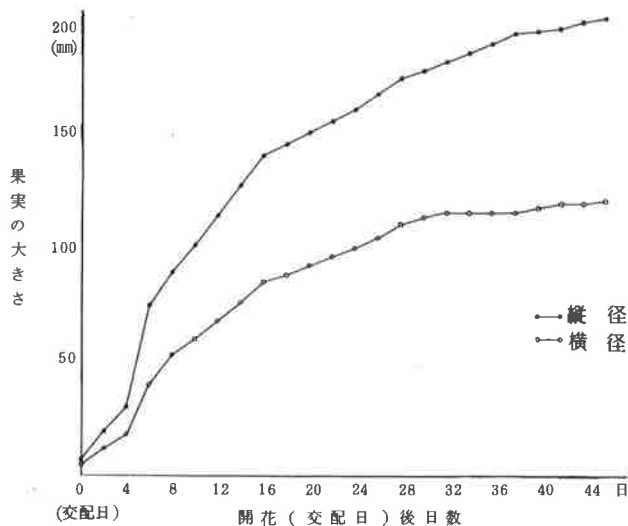
灌水は、5~9月の間は毎日1回、ただし、

8月は1日に2回行った。10~4月は、2~3日に1回とした。冬季の温室内温度は、日中25℃以上にならないようにし、最低温度は15℃以上を保つようにした。なお、夏季は、天窓側窓とも全開であった。湿度は、夏季55~75%、冬季75%以上であった。



註) 0日(交配日)から2日ごとに46日まで記録、果結枝の長さ1 m葉数12枚

果実の肥大過程



果実肥大曲線